平安かなと宋代草書の連綿比較研究
『高野切第一種』と『李太白憶旧遊詩巻』を中心に

李　輝

はじめに

連綿という視点から見ると、宋代の書の連綿表現は晋、唐の書より少ないが、黄庭堅の草書は続けて書くことが多く、独特な個性を持っている。一方、同時代の日本では国風文化の影響で、かな書道の古典とされる高野切が制作された。その書風からみると唐風は少なく、日本民族の形式を発展してきたと考えられる。本研究は黄庭堅の代表作「李太白旧遊詩巻」とかなの代表「高野切第一種」の二点をもとに、唐の草書からの受容と変容の観点から考察し、また同じ時代の影響関係がない二つの作品を比較する研究である。これによってそれらの異同を探し、規則を総括することで、連綿表現について更にはっきり認識することを目的とする。研究方法については比較文学の影響研究と平行研究を参考にして、かなと草書の比較研究に活用する。

第一章　連綿の定義

連綿の概念については、まず中国書論の中に意連と形連の記述がある。北宋の郭若虚は『圖畫見聞誌』で連綿は気の審美範疇に属し、更に、気脈の表現の形式であり、気脈は連綿の本質でもあることを示した。しかし、中国書論の中で連綿はいくつかの弊害を持つとも批判した。主に実用的な機能を破壊すことは、審美の上では俗性を持っているという主張である。

一方、江戸以前、日本の書論の中で「連綿」という言葉は使用されていないが、連綿に関する記載は幾つかある。例えば『才葉抄』の「合字」、『入木抄』の「草は点も字も連続して兼ねたる体なり」などは連綿の意識と非常に近いと思われる。江戸時代の澤田東江『東江先生書話』の中で「独草連綿草といふ話」の一節がある。これは、初めて中国書法史と書論の立場で全般的に草書の連綿について述べた論述である。現代書学著作を基にして、かな連綿の概念を踏まえて考察すると次のような結果になる。連綿は「変形させられた二字・三字を一字のように、あるいは文字群を単体として続けて書くこと」。連綿表現は日本語の縦に連なる言語形態によって音写する文字と、人々が主観的な審美意識で改造する文字との二重の原因の下で発達してきたと考えられる。

中日書論における連綿定義の比較は次になる。1．中国草書が発展するとともに理論の制限も受ける。一方、かなは厳しい法度の制限を受けない、粘着語の表現に適応するため、字の法則を破壊することも考慮する必要はなく、できるだけ変形して字と字の間を互いにぴったり合わせ、更に文字群の表現形式となった。日本語は音写文字である。即ち読む特徴がある。それに対し漢字は表意文字である。即ち見るという特徴がある。2．中国では矛盾統一思想のおかげで連綿を極端に発展させなかった。書論から見ると、審美の上では、連綿の運用は制限されている。常に連綿を「俗」や「書病」等と結びつけている。これ故、中国の書法史から見ると、連綿が主流モデル以外の支流、技法の表現形式の一種となっている。一方、日本は中国と相反している。連綿表現の形式が日本民族の審美趨向と合うため、連綿はかな書道の中で重要な地位を占めている。ひいては、かなのシンボルにもなった。表現形式が同じであるのに、違う土地で異なる実をつけた。その原因は言語以外に、審美意識や文化の相違が関係していると考える。

第二章　連綿表現の考察

黄庭堅の連綿表現の受容と変容については、彼の作品、書論、彼に関する文献の中で知ることができる。彼の書学思想は主に俗さに反対するため、連綿表現に対して、張、懐より理性的であり、更に断の表現の方でも気を使った。黄

庭堅は連綿表現の方で時間性を主とする連綿方式を打破した。更に空間連続の新しい領域を開拓した。また、黄庭堅の独特な筆法も連綿に重要な影響を及ぼした。

「高野切第一種」の連綿表現の唐の草書からの受容については、黄庭堅のように筆蹟や書論、文献などから直接的な考察はできないが、醍醐天皇、小野道風と藤原行成たちを仲介として間接的に考察することは可能であった。例えば揺らぐ筆致の表情は、道風や行成たちの連綿意識と通じている。連綿表現について「高野切第一種」は主に受容した形跡がある。国風文化の影響で言語や美意識に適した表現形式、即ち変形させられた二字・三字を一字のようにあるいは文字群を単体として続けて書くことも生まれた。

第三章「高野切第一種」の連綿と「李太白憶旧遊詩巻」の連綿

「李太白憶旧遊詩巻」と「高野切第一種」の連綿表現を比較して、次のことが分かった。（以下は「李太白憶旧遊詩巻」を「李」、「高野切第一種」を「高」と簡略する）1．「李」は空間リズムを主とする、「高」は時間リズムを主とする。書写の速度や墨量、上下の文字の結構などによって生まれた連綿線の重―軽―重のリズム感は通じ合っている。しかし、連綿線と筆画を共用する場合は「高」は「李」より一層一体化する。その一体になる文字群の字数については「高」の方が多い。二つの作品の中では、本来表現の意味がない連綿線はより書の表現の中で、重要な地位を占めている。2．連綿と空間造形の比較について、それぞれ優れた点がある。「李」の字間が重なる割合は「高」より高いが、連綿している文字群の重なる割合は「高」より低い。つまり、「李」は放ち書きの場合で空間的連続を主とする。連綿する場合は字間を離れて時間的連続を主とする。「高」は「李」と相反している。「李」の行間と行間の関係も字間と同じく密接している。すべての字はその周りの字と象嵌しているような関係がある。行間の余白と連綿はともに流動的な空間を作りあげる。一方、「高」の方は行間と行間の関係はなく、安定感が強い。

連綿と軸線とは、つまり連綿と行間の左右運動である。軸線の傾斜度の調査を通して、「李」の平均傾斜度は「高」の三倍ぐらいあることが分かった。これによって「高」の連綿線の方向は「李」より真下に位置する。「高」の連綿の傾斜度は単一方向へ次代に変化している。「李」の方向転換は数か所あり、これによって一行の軸線は「S」形になることが特徴である。

結論　おわりに

日本と中国では民族文化も異なり、文字においても表音文字と表意文字という相違点がある。連綿は文字を書写する際に生まれるものであり、そのため日本と中国では連綿表現も異なるのである。概念についての「連綿」の認識は相反する場合もあり、中国草書は連綿を抑え、日本かなは連綿を伸ばす。これによって連綿表現の方でかなは変形させられた二字・三字を一字のように或いは文字群を単体として続けて書いている。中国草書の方は連綿と言うよりむしろ連続性が一番適切だと考えられる。書は読みものから、見るものへと進化する過程において連綿表現に人々の優れた貢献も捧げられた。黄庭堅の「李太白憶旧遊詩巻」は連綿表現において時間性を主とする連綿方式を打破した。更に空間連続の新しい領域を開拓した。また、黄庭堅の独特な筆法も連綿に重要な影響を及ぼした。「高野切第一種」は墨継ぎによる線の濃淡や太細の変化と連綿を結び合わせることで独特なリズムを現した。

【作品研究　創作】「『古今和歌集』より春の歌四首」

《釈文》

はるやとき はなやおそきとき、わかむ うぐひすだにも なかずもあるかな
やまかぜに とくるこほりの ひまごとに うちいづるなみや はるのはつはな
はるのよの やみはあやなし むめのはな いろこそみえね かやはかくる、
ひとはいさこ、ろもしらず ふるさとは はなぞむかしの かに、ほひ（後略）

《法量》

六〇・六×二四二・四センチ　四幅

《解説》

大字仮名と草書にはそれぞれの持ち味がある。特に仮名の連綿や、数多くの変体がなによる幅広い表現は、中国の草書にはない優れたものである。そのため、仮名の勉強は草書の創作において様々な面で役立つと考える。

『古今和歌集』より春の歌四首を選び、和歌を書写する際の伝統的な形式、一紙二行構成で「五七五」、「七七」を各一行ずつ配する方法で書いた。作品の基礎を「高野切第一種」に置いたが、その内墨継ぎによる表現法を活用して穏やかな雰囲気にまとめること等は「高野切第一種」に学んだ点である。また変体仮名の選択を一工夫することにより、作品に変化をつけられることも学んだ。この他、近代における大字仮名の巨匠から表現法を学ぶことで、線条の質感や文字の結構について大いに啓発されるところがあった。作品を見直すと未熟な箇所が数多くある。未だ仮名について学び始めたばかりであるため、今後も更に仮名の理論や技法の勉強に精を出し、多くのことを吸収して行きたいと考える。

【作品研究　臨書】「臨高野切第一種」

《釈文》

古今和歌集巻第二十　雑　神歌
　おほなほひのうた
あたらしき　としのはしめに　かくしこそ　ちとせをかねて　たの（後略）

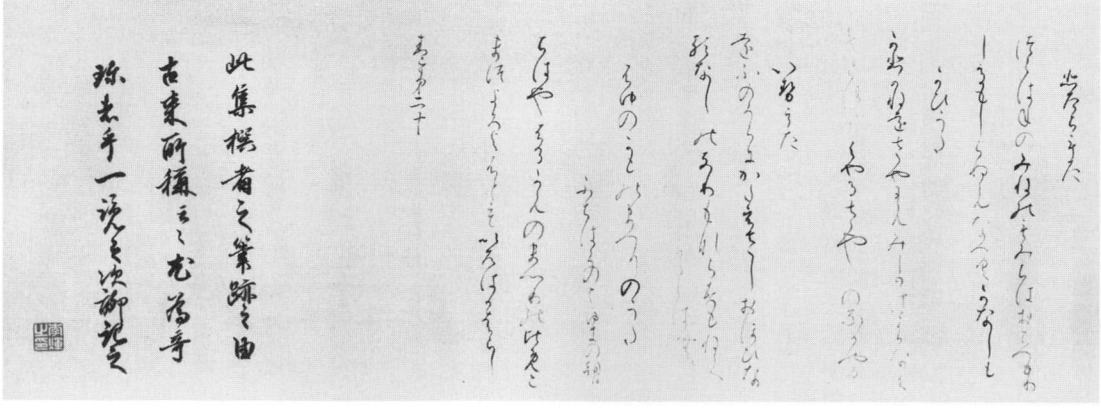
《法量》

二六・五×二七三・〇センチ　一巻幅

《解説》

「高野切第一種」中、完本の「古今和歌集巻第二十」を全臨した。「高野切第一種」の地位は中国書法における「蘭亭序」と同列だと考えられており、仮名を代表する名品の「高野切第一種」を学ぶことで、仮名の普遍的な知識や技法を身に付けられると思う。例えば「高野切第一種」の「ひと」や「こと」等のように、言葉のまとまりに沿う形で、字形を変形した上で連続し、二字・三字（文字群）を一字（単体）のように書くこと等である。第一種の連綿は墨継ぎによる濃淡の変化と太細の変化とが相まって独特なリズムがある。また小字の仮名だが、様々な対比により大字より気骨が強いと思う。研究のために様々なことを考えて臨書したため、仮名の認識も一層深くなった。

本臨書は原寸臨書である。字形、線質の他、墨の潤渇も原本に忠実な臨書を目標とした。しかし臨書の際、多字数を力強い線で連綿していくことは一番難しかった。第一種の線は婉曲だが、入念な筆使いのため線も強い。また、第一種のように墨の潤渇が自然に移ろう段階には至らなかったが、第一種の臨書を通して改めて仮名書道について理解が深まった。今後は、他の古筆からも伝統的な技法を学び、書の基礎を豊富にしていきたい。

【創作】『古今和歌集』より春の歌四首

【臨書】臨高野切第一種（一部）